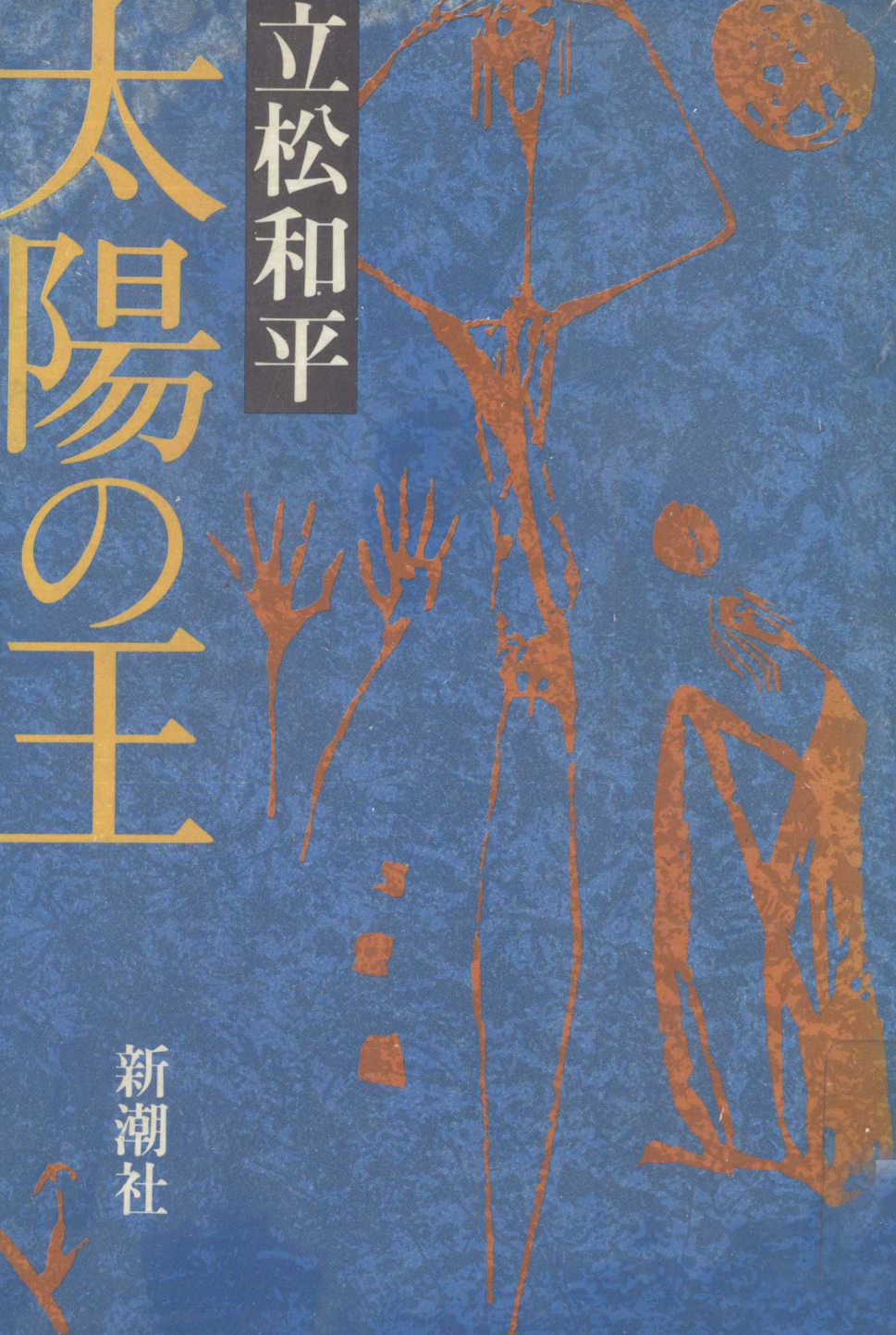
太陽の王

立松和平



新潮社

立松和平

太陽の王

新潮社

太陽の王

定価一〇〇円

一九八二年二月一〇日印刷
一九八二年二月二〇日発行

著者　立松和平
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一番地
電話　東京(266)五一一一(業務)
東京(266)五四一一(編集)
振替　東京四-八〇八　〒一六二

印刷　株式会社光邦
製本　神田加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Wahei Tatematsu, Printed in Japan. 1982

太陽の王

装幀——赤坂三好

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

横たわって、揺れる天井を見ていた。天井は右に左に傾ぎ、近づいては遠ざかり、埋めこまれた薄暗いオレンジ色の電球が今にもこぼれ落ちてきそうだった。乗客たちは梱包された荷物のように土色の毛布にくるまり眠っていた。寝息に、どんっと船腹を打つ重い波の音がまじった。波を進んでいく速度感が全身に伝わってきた。誰かが船酔いをしたらしく、胃液の饐えた臭気が漂っていた。時計がないので時間がわからない。静夫は目蓋に力をいれて目をつぶった。粘りつく汗に濡れている全身が不快だった。元気あふれる蜂が羽撃いているふうに頭の芯が痺れていた。頭の中に虫が住みついたのかもしれないなと、時折静夫は思うことがあった。虫が食い荒らして頭の中は穴だらけだ。さなぎから羽化した透明な虫が、眼や耳よりあとからあとから飛びたっていく。人々の頭の内側で繁殖した虫が街には充満している。路上や部屋を飛びまわる透明な虫を吸わないでは呼吸もできないのだ。静夫はぬるぬるの額を腕で拭った。暗い海を鉄の箱に閉込められて突き進んでいく自分の姿が浮かんだ。

頭上に張りめぐらされているパイプの厚塗りのペンキに赤錆びがしみだしていた。その中をコンコンと棒でたたくような音をたてて水が流れていた。鉄錆びに染まっている便器に放尿をすると、静夫はふと思いついて甲板への鉄の階段を昇った。鉄のにおいは血のにおいを思い出させた。

ピンボールや光線銃のゲーム機械が置いてあるロビーに人影はなく、売店は水色のシャッターを閉ざしていた。ジュースの自動販売機の光を受けて、静夫の影は縞になって扇のかたちにひろがった。急傾斜の階段を上へ上へと昇った。時々足元が払われるようにして階段が揺れた。

薄明であった。明けるか明けないかの淡い闇に空は茫々としていた。青銅色の波が隆起しては陥没する飽きることのないくりかえしが、海の際限のない精気を感じさせた。船体は暗い波を刃物のように割り、その勢いで前進しては、ふたたび舳先を空に突上げた。白い波しぶきが誰もいない甲板にとんだ。静夫はキャビンの軒下に立ち手摺りにつかまっていた。プラスチックの手摺りは潮で粘りついた。切開された波が船腹と海との間に溝をつくって後方にとびのいていった。少し離れると海面は遠近感がなくなり、灰色の壁の中に塗りこめられた。壁の彼方より広漠たるひろがりを感じさせる波の音がザザッザザッと鈍く籠って聞こえてきた。掌をひろげると、流れていく霧の微粒子が見えた。静夫は胸いっぱいに霧を吸った。肺の内側からぐっしょりと湿っていく気がした。そのままでしばらく薄明の空と暗い海とを前にしていた。

二等船室のカーペットが敷かれている大広間には、埃っぽい毛布に梱包された乗客たちが、隙間なくならんでいた。通路に脱ぎ散らされた靴から昇る蒸れた臭気が鼻をついた。静夫は横たわる乗客たちを爪先立ってまたぎ、壁際の自分の寝床にいった。毛布は脱け殻のように張りをなくして褐色のカーペットにしなだれていた。壁の丸窓は金属の蓋がかぶせてあった。静夫は汚水にでもつかるような気持で以前に使った何人もの体臭や髪油のにおいがしみついている毛布にくるまった。一昨日の夕方出航して以来昼間もうつうつと眠りつづけていたが、まだ眠れそうだ。船の中にいる間は、いくら揺れようと、安心なのだった。船には何でもあった。桟橋から乗船し二等船室に毛布を敷いて自分の席を確保するや、静夫は浴室にいった。脱衣用のロッカーはどれを

開いても空っぽで、浴室の床のタイルは乾いていた。湯はぬるいが清潔だった。首までつかっている湯面に小波が立ち、静夫は船が走りだしたのを知った。風呂をでてから食堂にいき、遠のいていく夕暮れの港を見ながらカレーライスを食べた。ビールを飲みたかったが節約した。気持が高ぶっている乗客たちはまだほとんど甲板にいるのだ。静夫はうまく立ちまわっているという自覚に満足して、先につくっておいた寝床にもぐりこんだ。空腹で目覚めると食堂に一番安いカレーライスを食べにいき、また眠った。こんなに一生懸命眠ったのはここ数年ないことだった。熟睡していれば何もわからないながら快適で、まわりがざわついている中で夢を見ているような見ていないような眠りの浅瀬を渡っているのも気持よかった。二十五歳になった今では、旅の果てに何かがあるとはすでに信じられなかった。茫漠とした薄明の海原が、朝靄の中を夜勤明けの男たちが行進してくる都会の墓場の光景や、黒ぐろと夕闇が迫ってくるさみしい田舎の景色に重なった。船が動いている間は少くともこの身のおきどころがあるのだ。それ以上を求めようとは思わなかった。静夫は内側から鍵をかけるようにして眠りつづけた。眠りながら旅をしているのだ。浅い眠りの中で何度も夢を見た。醒めたそばから忘れていった。

「あんたって、半分ぐらい眼を開けて眠るんだな。さっきからずっと顔見てたけどさ」

目蓋をあげると、すぐ鼻先に男の顔があった。髭の剃りあとが青々とした下顎が動き、煙草臭い息がかかった。起きろよと男は静夫の肩に手をかけて揺すった。

「とろとろ、とろとろ、いつまでも眠ってると、目玉が腐って溶けちゃうぞ。ほら、こぼれてきた」

男は掌を静夫の顔に向かって突きだし、こぼれてくる目玉を受けとめる格好をした。握った目玉を遠くに投げた。静夫はむかっ腹を立て、自分の頬を掌で強く打った。男は大きな紙袋に手を

いれて罐ジュースを摑み、飲みなさいと静夫の鼻先に突きだした。静夫が顔を横に振ると、男は罐の蓋をもぎとった。こぼれたオレンジジュースが褐色のカーペットに点々と黒いしみをつくった。寝そべったままで罐を握らされた静夫は上体を起こした。ジュースは指を濡らして毛布にもたれた。

「せっかく船に乗ったんだから、海でも見たらどうだね。横で眠ってばかりいられると、こっちまで苛々するさ」

男は本気で怒っているふうないい方をした。静夫は溜息をつき、罐の端に唇をあてた。ジュースは生ぬるかったが、もったいないので最後まで飲んだ。口の内側に甘ったるい膜ができた。男に無遠慮に見つめられていた。静夫が視線に力を籠めて見返すと、男はおどおどして横を向いた。静夫は空罐を床に置き、腕枕して横たわった。擦切れて織り目の糸が見える毛布は腹のところにしかかけてなかった。出航した時にくらべれば空気は暖かくなっていた。丸窓から光が渦を巻くようにしてはいってきた。すでに眠気はなかったが、静夫は無理に眼をつぶった。目蓋は赤く明るかった。今にも男に肩を揺すられそうな気がした。

五分間か十分間か、見られている視線を感じ窮屈さに耐えてじっとしていた。頭の芯には相変らず元気のいい蜂が鋭く羽撃いていた。そっと薄眼を開けると、男はいなかった。あぐらをかいた小太りの男の姿が目蓋の裏側に残っていた。静夫は横たわったまま視線を周囲に動かした。まず眼についたのは横ずわりしてトランプをしている娘たち五六人のグループだった。娘たちは高い声をあげてカードを座の真中に投げた。カードが光を撒き散らした。合板の壁に背中をもたれ片膝立ててノートに書きものをしている若い男がいた。男は時々ボールペンの尻で頭を掻いた。幼児が二人追いかけあいをし、うるさいと母親が大声でたしなめた。四角い大きなリュックで場

所をふさいだ学生の一団が腕相撲をしたり議論をしたりしていた。こんな喧噪の中で眠っていたのかと、今さらながらに静夫は思った。静夫は跳ねあがるようにして立った。海は凪いでいるのか揺れはなく、エンジンの音さえしなければ船の中にいるということも忘れそうだった。

行き場もなさそうに廊下を人がいったりきたりしていた。階段に坐って罐ビールを飲んでいる男がいた。静夫は男を蹴りそうにして階段を昇り、人でごったがえすロビーにでた。先程静夫を揺り起こした小太りの男の、光線銃ゲームに夢中になっている横顔が見えた。銃の狙いをつけて引金を引くと轟音がして、ガラス箱の中を横に動いてきた動物が向こう側に倒れた。男は肩に力をいれさかんに銃を射ちまくるのだが、ブリキ板を切ってつくった象やキリンはめったに倒れなかった。ゲームオーバーの赤ランプが点いても男は引金にかけた指をガチャガチャと動かし、やっと気づいて狙いをつけたままポケットから百円玉をだし手探りで機械の穴にほうりこんだ。ふたたびガラス箱の中が明るくなり、三列になったブリキの動物たちが行進をはじめた。箱をのぞいていた静夫は、ほらやってみいと男に銃を渡された。男の体温の残る銃は重心が機械に固定されていたが、見よう見まねで構えてみると持ち重りがした。少しペンキの剝げた縞馬がごとごと音をたてて銃の前を渡っていった。狙いがわからないまま静夫は引金に掛けた指に力を籠めた。轟音とともに遠い草原に光線がとんだ気がした。縞馬は一頭も倒れずに駈けつづけた。静夫は犀やライオンを銃の先にとらえては射った。河馬がはね跳ぶように倒れた。不意に引金に手応えがなくなり、草原が暮れた。静夫が銃を放すと、すかさず男が百円玉をほうりこんでくれた。草原に朝がきた。駈けまわる獣を片っ端から射った。空色のガラスに写っている鳥が失速し、くるくる回転しながら落ちた。獣たちはおもしろいように転倒した。途中で肩を摑まれ、男とかわった。一歩二歩離れてみればつまらないガラスの箱だった。

ゲームオーバーになると、男は静夫の肘を摑んで隣のピンボールの台にいった。ゲームをしようかどうか迷っているふうの中学生を腕で払い、男は硬貨を無造作にほうりこんだ。両替したのかポケットに百円玉はたくさんある様子だった。ガラス箱の底にはピンボールをしている男と女の姿が派手な色彩で描かれていた。色とりどりの豆電球が点滅していた。箱の奥で機械の作動音がして銀色の金属球がでてきた。金属球がバネに弾け穴を渡って点数を重ねるたび、男は縄跳びをするように全身でリズムをとって喜んだ。機械を壊しそうな勢いでボタンを押して弁を操作した。チンチンと鐘が鳴りつづけた。情熱的な男の仕種に気恥ずかしさを覚えて静夫はその場を離れた。

ドアをひとつくぐれば海だった。光のあふれる賑やかな空の下に群青色の海が息づいていた。静夫は船端の廊下を歩いて舳先の甲板にでた。舳先は波を切り裂いては空に立上がる往復運動を相変らずくりかえしていた。舳先が波に突っこんで水しぶきがあがると、束の間淡い虹ができた。虹は後方に吹き散らされて消えた。ザザッと雨のようにしぶきが落ちた波にもうひとつ小さな波が刻まれた。船端にあぐらをかき煙草を吸っていると、動いているのは船ではなく海のほうに見えた。荒れ騒ぐ群青の海に陽を浴びた細長い三角形の白い広場が置いてあった。広場は浮かんでいるのではなく、深く土台がつくってあるように安定しているのだ。海が身もだえしながら後退っていく。海と白い広場との中心に静夫がいた。空がたぐられていくように赤く焼けた雲が吹かれてきた。静夫の内側にたまっている力が薄い皮膚から滲んでくるようにうっすらと汗がでた。海も空も自分の前に平伏している気がして、静夫は満ち足りていた。波に囲まれた狭い広場にも右往左往している人がいた。彼らは手摺りにもたれて海を見ていたかと思うと反対側の船端にいき、船腹に縛りつけられているボートに腕を伸ばして触れたりし、ベンチにつまらなそうに坐っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

てみては、またそのへんを歩いた。静夫はあぐらの足をはずし、板と板の継ぎ目にゴムが挟んである甲板にあおむけに寝そべった。顔を覆っていた掌の指の間から洩れた陽光を瞳にいれた。赤い目蓋の内側に、見た覚えのないマストの紫色の影があった。静夫は手足から力をぬいてそのまま横たわっていた。

肩に固いものがあたった。顔を横に倒して片目を開けると、黒い革靴だった。大男が立ちはだかっているふうに見えた。逆光のため表情は窺えない。足にタックルしてやろうかと思いながら静夫は起上がった。先程の髭の濃い小太りの男だった。影になった眼窠の奥で瞳が笑っていた。

「眠ってばかりいて、あんたは死んだ魚みたいだなあ」

「いいかげんにしろよ」

静夫は怒ってみせた。男はにやにやしていて、静夫は自分の言葉が届かないのではないかともどかしさを覚えた。男は太い腕を静夫の首に絡みつけてきた。

「飯でも食いにいこうや。昼飯まだだろう」

男の腕の中で静夫は自分の首筋が魚のように濡れているのを知った。歩きだした男の歩調より速度を遅らせて静夫は男の腕から逃がれた。たっぷり筋肉がついた重い腕だった。陽と潮のにおいが廊下にも満ちていた。熱にペンキが溶けだしたのか鼻をつく油脂のにおいがした。時間がずれているらしく食堂は閑散としていた。男は静夫に確かめもせず自動販売機に千円札をいれて、一番高いランチと生ビールの切符を二人分買った。

「観光旅行だろう。気楽な顔してる」

席につくなり男が声をかけてきた。奢ってもらった手前静夫は何かいい返さないと悪い気がしたが、言葉が浮かばずに黙って頷いた。潮で白く汚れた窓ガラスの向こう側に海がひろがってい

た。海は生きて動いていた。生ビールが運ばれてきて、静夫の口の中に唾が湧いた。静夫は海とビールとを交互に見て、男が飲めよというのを待った。

「乾杯」

と男はいった。ジョッキを持上げ縁を打当ててから、静夫は一気にビールをあおった。冷たい泡が喉元にはじけた。全部飲んでしまうのはもったいなくて、静夫はジョッキをそっとテーブルに置いた。無数の泡が踊り狂ってしずまった。海が光っていた。ガラス張りのこの部屋だけ海に向かって突出しているようだ。

「あんた、無口だな。何だか機嫌が悪いみたいだな。いつもそうなのか」

男は身を乗りだし静夫の顔を覗込んでいった。テーブルの幅が広かったので距離は縮まらず、男のわざとらしい仕種ばかりが浮上がった。静夫は顔を横に振って笑った。ビールのせいで上機嫌この上なく、言葉がひとりでに舌の上に転がった。

「砂糖キビ畑で働きたいんだ。人手不足だから誰でも雇ってもらえるって聞いたんだ。どうせなら南のはずれの島にいこうと思って。夏が好きだし」

「あんた、変人だな」

男は驚きを隠そうともせずに眼を見開いた。見つめられて静夫は視線をそらし、ビールを少し飲んだ。ジョッキのガラスの壁の内側を泡がすべり落ちていった。男は聞こえるように溜息をついてみせた。

「騙されてんだ。金は安いし、あんな仕事、誰もやりたがらねえよ。きついだけで、いいことないさ。最低だ」

「安くたっていいさ。飯をくわせてもらえれば。汗流したいんだ」

「スポーツのつもりだな。甘いな」
男は唇を歪めてそこに笑いをたたえていた。甘いなと男は小声でくりかえした。甘い甘い甘いとまたいった。エビフライのランチがこなければ静夫は席を立つところだった。ソースをたっぷりかけてエビフライに齧りついた。熱いエビの肉が舌に跳ねた。静夫は飯粒を頬ばったままでいった。
「勤め、辞めてきたんだ」
「俺もそうだ」男は高い声でまくしたてはじめた。「建築会社さ。俺は大工だよ。左官屋もやるけどな。冬さ、ビルの屋上でタイル張りするのは泣きたくなったなあ。風が寒くて、セメントも凍っちゃうんだぜ。五年も我慢して働いて、今年もこれから暖かくなるところだっていうのに、俺、辞めちゃった。主任だったのにな」
黙るや、男はエビフライやサラダや飯を忙しく口に運んだ。静夫も黙って食べつづけた。食べながら、ひどく空腹だったことに気づいた。
「俺、病院に勤めてた」
口からでまかせをいってはみたものの、静夫はそれから先を話す気はしなかった。最後のビールをあおった。ジョッキのガラス越しに見る海は岩だらけの山のようだ。男は静夫には頓着なく一人で話しつづけた。自分と同じ年頃だなと、静夫は嚙むのとしゃべるのとを同時にする男の口の中を見て思った。
「砂糖キビ畑にいくなんて変わったところが気にいった。船を乗り換えるのに、二日や三日はあるんだろう。俺の家に泊まれよ。無駄な金は使うことねえさ。女が欲しければ紹介してやるぜ。俺は暇だから観光案内してやる。飯でも酒でも、俺にまかせろよ」

男はおーいと叫んで腕をあげ、傍に立ったボーイにビールもう一杯ずつといって千円札を一枚テーブルに置いた。食券買ってくださいとボーイは遠ざかっていった。静夫は椅子の脚を踵で蹴って立ち、千円札を摑み自動販売機に向かって歩いた。金も荷物もたいしてないので、たとえ男の腹に一物あったとしても、静夫を騙しようはないのだ。男の親切に乗ってしまえばいい。食堂の入口に置いてあるジュークボックスの前で大学生らしい娘たちが踊っていた。静夫は頭を振ってリズムをとった。ロックのリズムと船の揺れとに歩調があわず、静夫は一歩ごとに前のめりになる気がした。ひさしぶりに飲んだビールで酔ったのかもしれなかった。

排水噸数八千トンのこの大型貨客船が着いたらその街で安宿を見つけて四五日過ごし、定期船に乗って離島にいくつもりだった。砂糖キビ畑で働きたいのだが、先方に電話をいれたわけでもなかった。そこで仕事が見つからなかったら、帰路の船賃すら心細いほどの所持金しかない。砂糖キビ刈りの季節には極端な人手不足で暇そうな旅行者は片っ端から口説かれて畑仕事を手伝わされると、噂を聞いていた。土方仕事なら一年中あるらしい。人が暮らしていて、しかも仕事があれば、生きていくことは簡単なはずだ。静夫はできるだけ遠くにいって誰も知らない土地でひっそりと暮らしたかった。そのまま消えてしまってもよかった。

二日前の早朝に家をでた。鉄筋コンクリートの市営住宅の四階の部屋には家財道具をそっくり残していた。蒲団を畳んで押入れにいれ、茶碗や皿は洗って食器戸棚にしまい、生ゴミはビニール袋にいれて通路にだし、最後に電気のスイッチとガスの元栓を確認した。カーテンを締めきった部屋には薄闇がたまっていた。鉄の扉を音をたてないように締めて鍵をかけてから、その鍵を

どうするか迷った。ゴミ袋にいれてしまおうかとも思ったが、結局ドアにつくってある郵便受けにほうりこんだ。郵便受けの箱は壊れて取除いてしまったので、鍵は玄関の三和土にチャリンと落ちた。リュックを担ぎゴミのビニール袋を持って、静夫はコンクリート階段を降りた。透明な空気が張りつめていた。墓石のような四階建ての建物の間にたまった冷たい空気の中で、静夫のはく息は白くきれいだった。ゴミステーションには野犬が三四匹集まり、夜のうちにだされたゴミをあさっていた。くちゃくちゃとものを嚙む音をたてる野犬も白い息をはいていた。近づいていこうとすると野犬は牙を剝いて唸り、静夫は遠くから力を籠めてビニール袋を投げつけた。野犬は素早く跳びすさった。袋が破れてゴミが跳び散った。魚の食い散らかしを嗅ぎあてたらしく、野犬はそのゴミを食べはじめた。人影はなかったが、車のエンジンを暖める空ぶかしの音がしていた。静夫はトタン屋根の自転車置場にいき、鍵のついていない自転車を見つけてこぎだした。学校のマークがついている高校生の自転車だった。明けたばかりの新しい空は青く澄んでしみひとつなかった。黒い雑木林の上にならんだ遠い山が白く凍っていた。ペダルをこいだままふと振返ると、朝日を浴びたアパートの群れが茹であがったように赤かった。田んぼと雑木林の中に不意に出現した住宅団地だ。ゆき子と三年間暮らし、そこで里美が生まれ育った土地なのだが、今となっては静夫には未練もなかった。いやそこに団地が建っていること自体が腹立たしくて悲しいのだ。アルミニューム箔のような銀色のビニールハウスの脇を通った。ボイラーの煙突からでる煙が空を汚していた。とるものがとれたらすぐにトマトをつくりはじめた。一晩中ボイラーを焚いていなければ死んでしまう作物など狂っているのだ。その狂ったトマトや苺をつくっている男も狂っている。アスファルト道路も、麦畑も、道端の枯草も、細かく切った藁が敷きつめてある田んぼも、雑木林の裸木も、地上にあるものは何もかも粉を振りまかれたように霜に覆われて

キラキラと輝いていた。手袋をしていない指が寒さに痺れて痛くなり、片手ずつポケットでぬくめてはハンドルを握る手を交代した。身体が暖まるようにと速度をあげれば、耳が千切れ、目尻に涙が滲んだ。凍った空に頬をそがれた気がして静夫は幾度か掌を頬にあてた。石と石を重ねたような鈍い感触が伝わった。掌を見ても血はでていなかった。自転車はよく手入れがしてあって軽い。ひとこぎごとに空が明るくなってきた。屋敷林の杉林がある大きな瓦屋根の家をまわりこむと、冬枯れの田んぼの間をつづいていく農道の彼方に、砕け散ったガラス片をたくさん地面にさしたような街が見えた。傷だらけだと思った。何もかもが傷つき血を流している。

駅前に自転車を乗り捨てた。列車は屋根に雪を乗せてきた。夜行列車で、乗客たちは座席に足を投げだし眠っていた。床には空罐や紙屑が散乱し、網棚にはびっしりと荷物が乗せてあり、通路に新聞紙を敷いて横になっている人もいた。暖房がききすぎてじっとしていても汗ばむほどだ。荒涼とした車内に座席を見つけられないこともなかったが、静夫は入口のドアの前に立った。見慣れた山が揺れながら横に動いていった。灰色の鉄橋を渡った。鉄分がしみて褐色になった石河原の中央部に女の黒髪をよりあわせたような心細い流れがあった。霜は溶け、麦畑は黒く濡れはじめていた。間もなく乾いた冷たい風が吹くだろう。風は土埃を巻上げて畑を奔馬のように駈けまわり、渦を巻いて空に上昇し、青空を黄色っぽく汚すのだ。冬の間中吹きまくる風に家の中が土埃でざらざらになっても、みんなは黙って耐えていた。地面にガラス片をさしたような街をいくつも過ぎた。ガラス片は霜柱を連想させた。静夫の故郷はここから五十キロ東に寄った似た気候の土地である。同じような風土だが、知った人が一人もいない土地を選んだつもりだった。生まれた家の北側の庭にガラス片を縦にならべたような霜柱ができた。静夫は子供の頃よく黴のにおいのする霜柱を土をつけないようにそっと摘んで舌にのせた。冷たい霜がゆっくりと溶けてい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com